

## 援助授与行動と援助要請・受容行動の間の関連性

—行動経験が援助者および被援助者に及ぼす内的・心理的影響の研究—<sup>1) ~3)</sup>

高木 修 ・ 妹尾 香織

Relationship between help-giving and help-seeking-receiving:  
Effects of giving and getting help on the helper and the helped.

Osamu TAKAGI and Kaori SENOO

### Abstract

The relationship between help-giving and help-seeking-receiving by the same person was investigated. Elderly people attending an institute for adult education ( $N=677$ ; age 57- 88 years, mean age 67.5,  $SD=4.6$ ) participated in the study. They completed questionnaires that assessed the following variables: experience of everyday helping behaviors as a helper and as a help recipient; psychological reactions to helping experienced by the helper and the recipient; basic view of helping behaviors and attitudes regarding help-giving, as well as attitudes regarding help-seeking-receiving including the motivation for help-giving and the motivation for help-seeking-receiving. The results indicated the following: (1) A positive relationship was seen between the diversity of help-giving behaviors and the diversity of help seeking-receiving: (2) The recognition of success of everyday help-giving by the helper positively changed the helper's attitudes about help-giving and help-seeking-receiving: (3) The recognition of success in everyday help-seeking-receiving by the recipient positively changed the recipient's attitudes about help-giving and help-seeking-receiving: (4) Positive attitudes about help-giving were positively correlated with increased motivation for help-giving and help-seeking-receiving: (5) Positive attitudes about help-seeking-receiving were positively correlated with increased motivation for help-giving and help-seeking-receiving. These results suggest that everyday helping behavior increases future helping behavior by both helper and recipient.

Key words: help-giving, help-seeking-receiving, influences of helping and being helped upon helper and the recipient of helping

### 抄 録

本研究は、同一人物における援助行動と被援助行動の関連性を明らかにすることを目的とし、高齢者大学の受講生、677名（57歳から88歳、平均年齢67.5,  $SD=4.6$ ）に対して、日常生活において経験する援助行動と被援助行動の両方とそれらについての感想や援助と被援助に関する基本的な考え方などを、質問紙法により調査した。その結果、1) ある人が行う援助行動が多様であればあるほど、彼らの被援助行動も多様であること、2) 日々の援助行動が成功的であると認識する人ほど、彼らの援助行動に対する態度と被援助行動に対する態度は一層肯定的であること、3) 日々の被援助行動が成功的であると認識する人ほど、彼らの被援助行動に対する態度と援助行動に対する態度は一層肯定的であること、4) 援助行動に対する態度が肯定的な人ほど、援助行動や被援助行動に一層積極的に動機づけられていること、5) 被援助行動に対する態度が肯定的な人ほど、被援助行動や援助行動に一層積極的に動機づけられていること、などが明らかとなった。これらの結果は、日々の援助行動や被援助行動の経験が、態度や動機づけの変化を介して、将来の援助行動や被援助行動に影響を及ぼすことを示唆している。

キーワード：援助行動、被援助行動、行動経験の内的・心理的な影響

## 問 題

我々は、日々、見知らぬ他者や日頃何らかの関係性を持った他者を助ける、反対に、そのような他者に助けられるなど、どちらか一方の立場に終始するのではなく、援助者や被援助者の立場で、援助を介してさまざまな相互作用を行っている。この立場や相手を換えて繰り返し経験する援助行動と被援助行動の間には、どのような相互規定的、循環的関連性が存在するのであろうか。

援助行動は、一般に、恩恵の授受を目的として、援助を与える援助者と援助を要請し受容する被援助者とが相互作用する一つのタイプの対人行動であり、既知・未知を問わず起こり得るものと考えられている。しかしながら、近隣社会において日常的にやりとりされる援助は、未知の人々の間の一過的な援助というよりは、ある程度持続している人間関係の中で交わし合われる援助であること (Amato, 1990; 西川, 1997) や、このような援助が好意のやりとりを目的として、ある程度習慣的に繰り返されること (高木・妹尾, 2002) が明らかにされている。しかも、日常生活における援助的人間関係の形成やその機能を検討した妹尾 (2003) は、人が、「助け合い」と聞いて想起することが、必ずしもポジティブな体験だけでなく、場合によっては、援助が、助けた側にも、助けられた側にもネガティブに働さうる経験であることを明らかにしている。すなわち、援助的相互作用は、恩恵の授受に伴う感謝や誇りといったポジティブな感情と、自尊心の傷つきや負担感といったネガティブな感情とが入り交じった複雑な経験であることが明らかにされている (例えば、Nadler, Fisher, & Depaulo, 1984; Nadler & Fisher, 1986; 西川, 1999; 妹尾・高木, 2004)。したがって、人は、日々、こうした過去の援助に関連する多様な経験をふまえて、現前の援助や被援助の状況に対応する形で、他者と相互作用していると考えられる。

ところが、社会心理学における従前の援助行動研究の多くは、助けるか、あるいは、助けられるかのどちらか一方の視点から、その心理過程を検討してきたが、援助者と被援助者の両立場から同時に行動経験の影響に接近した研究はほとんどない。そのため、日常的に、人が、援助者や被援助者の立場を交替しながら他者とやりとりしている行動の間の関連性はほとんど明らかにされていないと問題指摘されている (西川, 1997)。

ある個人が継続的に行う援助の間や場面や立場を換えて行う援助の間の相互規定的、循環的関係の問題については、援助者か被援助者かのいずれかの視点でそれぞれの行動の効果に着目した実証的研究が参考になる知見を得ている。まず、援助行動が援助者に及ぼす効果については、ボランティアを対象とした調査研究が、他者に恩恵を与えた経験が援助

者自身にとって成功的であったと認識する場合、その後の援助が促進されることを明らかにしている（妹尾・高木, 2003; Snyder & Omoto, 1992; Omoto & Snyder, 1995）。例えば、Snyder & Omoto (1992) は、ボランティア活動参加時の満足感がボランティア活動の継続や肯定的な方向への態度変容を規定することを明らかにしている。しかしながら、この研究の知見がボランティア活動だけでなく、近隣社会において知人や友人あるいは見知らぬ相手と日常的にやりとりされる種々の援助にも適応できるのか、成功的な援助行動の経験が以後の援助行動を動機づけるのか、さらに、援助行動が立場を換えたその後の被援助行動に影響を及ぼすのか、などについては明らかでない。

他方、被援助行動が被援助者に及ぼす効果としては、被援助者が行う返礼的援助行動の促進が知られている。返礼的援助行動とは、被援助者が、後に、以前援助してくれた他者（援助者）に対して、返礼として、立場を換えて援助を提供する行為である。Bar-tal (1976) がこの返礼的援助行動を向社会的行動の一形態と位置づけて以来、その生起メカニズムについて研究が行われ、他者から利益や好意を受けた場合、それと同じ、あるいは同程度のものを他者に返すべきだとする互惠規範や、援助を通じて生じた不衡平な状態を衡平の状態にもどすべきだとする衡平規範に規定されて、被援助者が、後に、立場を換えて援助を提供するというメカニズムが提案されている（相川, 1984; DePaulo, Nadler, & Fisher, 1983; Fisher, Nadler, & DePaulo, 1983; Gouldner, 1960; Greenberg, 1980; 松浦, 1992; Nadler, Fisher, & Depaulo, 1984; Nadler & Fisher, 1986; 西川, 1999）。例えば、返礼的援助行動を規定する要因として、援助者と被援助者の関係性を、衡平理論に基づいて検討した松浦 (1992) は、返礼的援助行動が、何かをお返しするといった物質的交換に依存するのではなく、礼を述べるといった心理的資源を投入する場合がむしろ最も多く、援助者側も礼さえ述べてくれればそれでよいとする場合も十分あり得るなど、衡平関係の維持に心理的交換が大きな役割を果たすことを明らかにしている。

しかしながら、これらの返礼的援助行動研究は、過去に援助を介して相互作用のあった他者への返礼的援助行動だけを検討しているために、被援助行動の経験がそのような相互作用のなかった他者への将来の援助授与行動にどのような効果・影響を及ぼすかについては明らかにされていない。また、返礼的援助行動研究の多くは、主に、援助を受容したことによる罪の意識や負債感や返報義務感といったネガティブな感情反応に焦点を当ててきたが、日常生活における援助的相互作用には、人が他者から受けた親切や好意に心から感謝し、幸せに感じるといったポジティブな感情反応も多くある<sup>4)</sup>。

なお、高木 (1997) は、援助を受けることが被援助者にとって役立つものであり、その

経験から喜びや感謝の気持ちを感じたならば、援助を受けることについてポジティブに感じるだけでなく、援助を提供することについてもポジティブに感じるようになるとしている。つまり、援助行動と被援助行動には相互規定的な関連性があり、かつ、この関連性が過去の援助と被援助の双方の経験に規定されていると考えるのである。

高木（1997）は、援助者としての援助行動の経験が、または、被援助者としての被援助行動の経験が、以後の援助行動や被援助行動に影響を及ぼす過程を以下のように提案している。まず、援助者の立場では、援助授与後に援助者は自ら与えた援助を振り返り、その結果を評価する。この結果評価とは、援助が被援助者の難事の解決に役立つものであったかどうか、つまり被援助者への効果に着目した「援助効果」と、援助者が援助を通じて自己変革・発展を遂げるように援助者自身にとって役立つものであったかどうか、つまり援助者自身への効果に着目した「援助成果」との2側面の評価である。そして、これらの評価が援助者の援助や被援助に対する態度に影響を及ぼし、さらに影響を受けて変容した態度が、その後の援助や被援助に対する動機づけに影響を及ぼすとしている。

他方、被援助者の立場では、援助受容後に被援助者は自らが受けた援助を振り返り、その結果を評価する。被援助が自己の難事の解決に役立ったかどうか、つまり、被援助者自身への効果に着目した「被援助効果」と、援助を与えたことによって援助者が自己変革・発展を遂げたと思うかどうか、つまり、援助者への効果に着目した「被援助成果」が評価される。なお、被援助者が行う評価においては、「被援助出費」、特に、心理的出費、被援助によって被援助者の自尊心がどの程度傷ついたかの観点から評価される。そして、これらの評価が被援助者の被援助に対する態度のみならず援助に対する態度にも影響を及ぼし、さらにその影響を受けて変容した被援助や援助に対する態度が、その後の被援助や援助に対する動機づけに影響を及ぼすとしている。

妹尾（2001）は、成功的な援助を経験したと認識する人ほど、援助や被援助に対する態度が肯定的な方向に変容することを明らかにして、上記の高木の仮説を支持している。しかし、被援助者が被援助行動後に経験する内的・心理的な影響過程全体に関するモデルの妥当性については、未だ十分に検討されていない。

そこで、本研究では、同一人物における援助行動と被援助行動の両方の経験に着目し、援助者および被援助者として行動を経験した後にどのような内的・心理的影響が出現するのかに関して以下の5つの仮説を設定し、その検証を通じて、援助行動と被援助行動の間の個人内の相互規定的、循環的過程（Figure 1）を検討する。

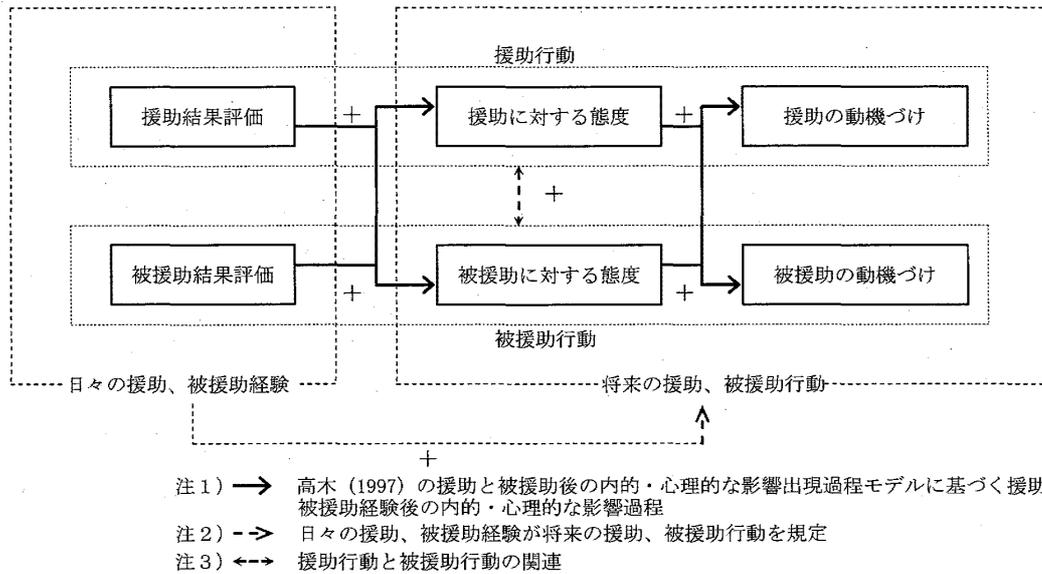


Figure 1. 援助行動と被援助行動の個人内循環モデル

仮説①：援助行動を多様に経験する人ほど、彼らの被援助行動も多様である。

仮説②：日々の援助行動が成功的であると認識している人ほど、彼らの援助行動に対する態度と被援助行動に対する態度は一層肯定的である。

仮説③：日々の被援助行動が成功的であると認識している人ほど、彼らの被援助行動に対する態度と援助行動に対する態度は一層肯定的である。

仮説④：援助行動に対する態度が肯定的な人ほど、援助行動や被援助行動に一層積極的に動機づけられている。

仮説⑤：被援助行動に対する態度が肯定的な人ほど、被援助行動や援助行動に一層積極的に動機づけられている。

なお、仮説①から仮説⑤の関係は、Figure 1のとおりであるが、この関係は、援助行動や被援助行動の経験が、将来の援助行動や被援助行動に影響を及ぼすことを前提にしている。すなわち、援助者と被援助者のいずれの立場の場合も、主観的な経験の有り様、つまり、各々の経験の評価が将来の援助行動や被援助行動に影響を及ぼす関係を示している。

なお、本研究では、近隣社会で日常的にやりとりされている援助に焦点を当てている。近隣社会で見られる援助行動の研究は、主婦を対象にした西川（1997）の研究があるが、本研究では、主婦と同じく地域生活者である高齢者を対象にする。そして、前述の援助行動と被援助行動後の援助効果、援助成果、被援助効果、被援助成果、被援助出費の5つの結果評価を鍵概念として、Figure 1の影響過程モデルの妥当性を検討する。

## 方 法

### 調査の対象者と手続き

調査対象者は、京都府内と兵庫県内の高齢者大学の受講生、計1,243名である。2001年9月下旬から11月中旬にかけて、高齢者大学の教職員の協力のもとで、質問紙法による調査を実施した。調査は、講座開始前に受講生に質問票を配布し、回答後回収する方法と、高齢者大学の教職員が調査票を配布し、受講生が自宅等で回答した調査票を後日回収する形式を併用した。最終的に、677名（回収率：54.4%）から回答を得た。

### 質問紙の構成<sup>5)</sup>

フェース項目 調査対象者の属性として、性別、年齢、および現在の健康状態としての生活自立度をたずねた。

援助行動と被援助行動<sup>6)</sup> 西川（1997）の日常生活における援助行動に関する項目を松井・西川（2001）が高齢者向けに改訂した援助行動項目から「健康を気遣っての電話」「2、3日姿を見せなかった時の声かけ」「おみやげの授与」「旅行への誘い」「車やバスでの席譲り」「代わりの荷物持ち」「目的地への車での送迎」「趣味のサークルなどへの勧誘」「炊事洗濯などの身の回り代行」「干渉しあわないような配慮」などの26項目を選定し、最近3ヶ月間に、援助授与行動として、援助要請行動として、援助受容行動として、それぞれを行ったことがあるかどうかをたずねた。そして、行っていれば1点を、行っていなければ0点を与え、援助授与行動得点を単純加算したものを援助行動得点（ $\alpha = .78$ ）とした。また、援助要請行動と援助受容行動の得点を加算して平均を求めたものを被援助行動得点（ $\alpha = .86$ ）とした。なお、援助行動得点が高いほど、援助者の立場で他者と援助的相互作用を多様に行っていることを、また、被援助行動得点が高いほど、被援助者の立場で他者と被援助的相互作用を多様に行っていることを意味する。

援助行動と被援助行動の結果評価 援助行動および被援助行動の結果評価は、上述の日常生活における援助行動や被援助行動を経験したことについての感想として求めた。まず、援助行動の結果評価の指標の中で、援助効果を「あなたの助けは、あなたが助けた人の役に立ったと思いますか」で、援助成果を「助けたことは、あなた自身にもプラスになったと思いますか」で質問し、その程度を「全くそう思わない」（1点）から「非常にそう思う」（5点）までの5段階で評定するように求めた。なお、得点が高いほど、結果評価が高いことを意味する。

つぎに、被援助行動の結果評価の指標の中で、被援助効果を「あなたは、助けてもらって、助かったと思いますか」で、被援助成果を「あなたを助けてくれた人には、あなたを助けたことで何か得るものがあったと思いますか」で、さらに、被援助出費を「あなたは、助けてもらって、プライドが傷ついたと思いますか」でそれぞれ質問し、その程度を「全くそう思わない」（1点）から「非常にそう思う」（5点）までの5段階で評定するように求めた。なお、得点が高いほど、結果評価は高いことを意味する。ただし、被援助出費は配点を逆転して得点化した。

**援助行動と被援助行動に対する態度と動機づけ** 援助行動と被援助行動に対する態度と動機づけは、援助行動と被援助行動に関する考え方をあらかず項目を独自に作成し、自分の考えがそれらに該当する程度を「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（5点）までの5段階で評定するように求めた。

援助に対する態度は、「困っている人を助けることは、良いことだ」「困っている人を助けることは、好きだ」「以前助けてくれた人を助けることは、良いことだ」「以前助けてくれた人を助けることは好きだ」の4項目でたずね、評定値を合計して態度得点とした（ $\alpha = .80$ ）。他方、被援助に対する態度は、「困ったときに助けてもらうことは、良いことだ」「困った時に助けてもらうことは、嫌いではない」「以前助けてあげた人に助けてもらうことは、悪いことではない」「以前助けてあげた人に助けてもらうことは、嫌いではない」の4項目でたずね、評定値を合計して態度得点とした（ $\alpha = .82$ ）。

援助行動の動機づけは、「困っている人がいたら、助けてあげたい」と「以前助けてくれた人が困っている時には、その人を助けてあげたい」でたずね、評定値を合計して動機づけ得点とした（ $\alpha = .61$ ）。他方、被援助の動機づけ得点は、「自分が困ったら助けてもらいたい」でたずね、その評定値を動機づけ得点とした。

なお、得点が高いほど、態度は肯定的で、動機づけは積極的であることを意味する。

## 結 果

### 回答者の属性

回答した調査対象者の性別構成は、男性が357名（52.7%）、女性が292名（43.1%）、性別不明が28名（4.1%）で、若干男性の回答者が多かった。年齢は、57歳から88歳までの年齢幅にあり、平均が67.5歳（ $SD = 4.6$ ）で、モードは68歳であった。

健康状態については、「たいした病気や障害などもなく、普通に生活している」が480名（72.6%）、「何らかの病気や障害などはあるが、日常生活はほぼ自分で行えるし、外出も

一人でできる」が177名 (26.8%)、「何らかの病気や障害などがあって、家の中の生活はおおむね自分で行えるが、外出は一人でできない」が1名 (0.2%)、「何らかの病気や障害などがあって、日常生活や外出にある程度の不都合がある」が3名 (0.5%) であり、回答者は、生活自立度の高い高齢者といえよう。

### 援助行動経験と被援助行動経験の関連性 (分析1)

まず、日頃行っている援助行動と被援助行動の間にとどの程度の関連性があるかを見るために、援助行動得点 ( $M=6.11$ ,  $SD=4.12$ ) と被援助行動得点 ( $M=2.80$ ,  $SD=2.70$ ) の相関係数の値を求めた。その結果、有意な正の相関関係の存在が認められた ( $r=.63$ ,  $p<.01$ )。つまり、援助者の立場で他者と多様に相互作用をしている人ほど、被援助者の立場でも他者と多様に相互作用をしていることが明らかとなった。

つぎに、援助行動や被援助行動の結果評価と援助行動得点や被援助行動得点との関連性を検討するために5つの援助、被援助結果評価それぞれの平均評定値をもとにLow群とhigh群に分け、両群間で援助行動や被援助行動の経験度の平均値に差があるかどうかをt検定で検討した。その結果をTable 1に示した。なお、援助行動と被援助行動の結果評価は、日頃行っている援助行動と被援助行動についての感想として求めているため、援助経験がないと回答した45名と被援助経験がないと回答した97名は分析対象から除いた<sup>7)</sup>。

まず、援助行動の場合、被援助出費に有意傾向差が認められたが、その他の結果評価はいずれもLow群に比べてHigh群の方が、多様に援助行動を経験していることが示された。つまり、援助行動や被援助行動の経験が成功的なものであったと認識している人は、日頃援助者の立場で多様な援助を行っているといえる。他方、被援助行動の場合、援助効果と被援助出費を除いて、援助成果、被援助効果、被援助成果のLow群に比べてHigh群の方が、多様な被援助行動を行っていることが明らかとなった。すなわち、他者に援助を与えたことが自分にとってもためになったと、他者から援助を受けることで助かったと、自分が援助を受けたことで援助した人も得るものがあったと認識している人は、日頃多様に他者へ援助を要請し、あるいは好意の申し出を受け入れているといえる。

### 援助行動や被援助行動の経験が援助者や被援助者に及ぼす内的・心理的影響 (分析2)

援助や被援助に対する態度を規定する援助行動と被援助行動の結果評価

援助行動と被援助行動の結果評価が、援助行動や被援助行動に対する態度に及ぼす影響を検討するために、援助および被援助に対する態度のそれぞれを目的変数とし、援助と被

援助の結果評価を説明変数とした重回帰分析を行った。重回帰分析結果をTable 2に示した。

Table 2によると、援助に対する態度には、援助行動の結果評価（援助効果、援助成果）と被援助行動の結果評価（被援助効果、被援助成果、被援助出費）が有意な影響を及ぼしており、援助効果、援助成果、被援助効果、被援助成果を高く、被援助出費を小さく認識する人ほど、援助に対する態度は一層肯定的であることが明らかとなった。他方、被援助に対する態度には、援助効果以外の援助成果、被援助効果、被援助成果、被援助出費のすべての結果評価が有意な影響を及ぼしており、援助成果、被援助効果、被援助成果を高く、被援助出費を小さく認識する人ほど、被援助に対する態度は一層肯定的であることが明らかとなった。

Table 1 援助行動と被援助行動の結果評価のLow群、High群における援助行動、被援助行動の平均値とt検定結果

結果評価	L群		H群		t値	L群		H群		t値
	N	M (SD)	N	M (SD)		N	M (SD)	N	M (SD)	
	援助行動					被援助行動				
a援助効果	96	5.81(3.39)	431	7.29(3.92)	-3.40**	96	3.04(2.60)	431	3.42(2.71)	-1.23
b援助成果	117	5.91(3.37)	415	7.28(3.98)	-3.39**	117	2.79(2.37)	415	3.49(2.75)	-2.52*
c被援助効果	314	6.61(3.69)	206	7.63(4.17)	-2.93**	314	3.06(2.37)	206	3.96(3.00)	-3.80***
d被援助成果	223	6.40(3.69)	295	7.40(4.00)	-2.89**	223	2.92(2.26)	295	3.75(2.91)	-3.53***
e被援助出費	258	6.67(3.69)	268	7.24(4.06)	-1.69+	258	3.44(2.84)	268	3.32(2.50)	.49

注1) a (M=3.88, SD=.83), b (M=3.80, SD=.82), c (M=4.23, SD=.77), d (M=3.49, SD=.89), e (M=4.34, SD=.78) 回答は1 = まったくそう思わない、3 = どちらでもない、5 = 非常にそう思う

注2) +p < .10, \*p < .05, \*\*p < .01, \*\*\*p < .001

Table 2 援助、被援助に対する態度を規定する要因の重回帰分析結果

目的変数	説明変数	$\beta$	決定係数	F値
援助に対する態度 (N=494)	援助効果	.11*	.22	27.18***
	援助成果	.12*		
	被援助効果	.15**		
	被援助成果	.18***		
	被援助出費	.13**		
被援助に対する態度 (N=495)	援助効果	-.01	.16	17.91***
	援助成果	.11*		
	被援助効果	.12*		
	被援助成果	.22***		
	被援助出費	.14**		

注1) 援助に対する態度 (M=16.96, SD=2.44)、被援助に対する態度 (M=15.19, SD=2.76)

注2) \*p < .05, \*\*p < .01, \*\*\*p < .001

つまり、援助を与えた他者が自分の援助で助かったと考えることは被援助に対する態度に有意な影響を及ぼさないことを除き、援助行動や被援助行動の結果評価が肯定的な人ほど、援助に対しても、被援助に対しても、態度が一層肯定的であるという関係が検証された。

援助行動や被援助行動の動機づけを規定する援助と被援助に対する態度

援助や被援助に対する態度が、援助行動や被援助行動に対する動機づけに及ぼす影響を検討するために、援助に対する態度と被援助に対する態度の評定平均値を用いて、それぞれHigh群とLow群に分割し、その組み合わせによって対象者を4群に分けた。そして、これらを独立変数にし、援助行動や被援助行動の動機づけを従属変数とした2×2の2要因の分散分析を行った。4群の援助行動と被援助行動に対する動機づけの平均値と標準偏差をTable 3に示した。

分散分析の結果、援助行動に対する動機づけの場合、援助に対する態度と被援助に対する態度の有意な主効果が認められた（順に、 $F(1,593) = 243.24, p < .001, F(1,593) = 10.30, p < .01$ ）。すなわち、援助に対する態度がLowの群（ $M = 3.92, SD = .57$ ）よりも、Highの群（ $M = 4.66, SD = .37$ ）の方が、機会があれば他者を助けようと一層動機づけられていることが明らかとなった。また、被援助に対する態度がLowの群（ $M = 4.12, SD = .61$ ）よりも、Highの群（ $M = 4.58, SD = .45$ ）の方が、機会があれば他者を助けようと一層動機づけられていることも明らかとなった。なお、援助に対する態度と被援助に対する態度の有意な交互作用は認められなかった（ $F(1,593) = .00, ns$ ）。

つぎに、被援助行動に対する動機づけの場合も、被援助に対する態度と援助に対する態度の有意な主効果が認められた（順に $F(1,619) = 64.66, p < .001, F(1,619) = 20.72, p < .001$ ）。すなわち、被援助に対する態度がLowの群（ $M = 3.34, SD = .92$ ）よりも、Highの群（ $M = 4.10, SD = .70$ ）の方が、困ったときには他者から援助を積極的に受け入れようと一層動機づけられていることが明らかとなった。また、援助に対する態度がLowの群（ $M = 3.35, SD = .88$ ）よりも、Highの群（ $M = 3.99, SD = .81$ ）の方が、困ったときには

Table 3 援助行動と被援助行動の動機づけの要因別平均と標準偏差

要 因	援助行動の動機づけ			被援助行動の動機づけ		
	N	M	SD	N	M	SD
援助態度L群						
被援助態度L群	202	3.89	.57	208	3.21	.90
被援助態度H群	54	4.03	.42	57	3.84	.62
援助態度H群						
被援助態度L群	103	4.56	.39	109	3.58	.91
被援助態度H群	238	4.70	.35	249	4.16	.70

他者から援助を積極的に受け入れようと一層動機づけられていることが明らかになった。なお、援助に対する態度と被援助に対する態度の有意な交互作用は認められなかった ( $F(1,619) = .08, ns$ )。

## 考 察

### 援助関連行動の心理的経験とその影響

本研究は、同一人物が経験する援助行動と被援助行動に着目し、援助行動と被援助行動の経験が援助者や被援助者に及ぼす内的・心理的な影響の出現過程モデル（高木, 1997）に基づいて、同一人物における援助行動と被援助行動の関連性を検討した。その結果、援助経験と被援助経験のいずれにおいても結果評価が援助や被援助に対する態度を規定し、この規定された援助や被援助に対する態度が、次に、援助行動や被援助行動への動機づけを規定することが示された。すなわち、援助者、被援助者のいずれの立場においても、自己の行動の結果評価が、日常生活における援助のやりとりにとって重要であること、そして、援助行動と被援助行動の間には正の関連性があることが明らかとなった。

まず、日常生活において援助者の立場で他者にさまざまな援助を提供している人は、逆に、被援助者の立場でも多くの場面で他者に援助を求め、援助を受けていることが明らかとなった。つまり、援助行動と被援助行動とは相互規定的な関係にあることが明らかとなった。この結果は、仮説①を支持している。また、一部の結果を除き、援助者や被援助者の立場からの日々の行動経験をポジティブに評価している人はそうでない人よりも、一層多様に他者と援助を介して相互作用をしていることが分かった。つまり、普段の援助が上手くいっていると評価する人は、将来、積極的に援助者や被援助者の立場で援助関連行動を行うことが示唆された。逆に、援助を介した相互作用に乏しい人は、援助が必要な状況において、援助を与えることができない、逆に、援助を求められずにいることが考えられる。

本研究は、近隣社会において頻繁に見られる非緊急場面における援助のやりとりの間に正の関連性があることを明らかにした。しかしながら、ある個人における援助経験間の相互規定的、循環的關係が、悪循環から好循環へと変容することにはいかなる要因が影響しているのか、このような関係は本研究で対象とした援助に特有のことであるのか、などについては今後の研究で明らかにしなければならない。また、本研究では、日常生活における典型的な援助行動において、援助者として、あるいは、被援助者として経験したことの有無をたずね、種類の多さを援助行動と被援助行動の多様性の指標として、それらの相関か

ら関連性を検討したが、今後は、援助の種類のみだけでなく、援助に関わる程度も考慮に入れて関連性を検討する必要があると考える。

援助行動と被援助行動の経験後の内的・心理的な影響を分析した結果、援助者の立場での援助効果、援助成果という2つの結果評価と、被援助者の立場における被援助効果、被援助成果、被援助出費という3つの結果評価が援助や被援助に対する態度を規定することが明らかとなった。この結果は、仮説②、③を支持している。さらに、援助と被援助の経験の影響を受けて変容した援助や被援助に対する態度が、援助行動や被援助行動への動機づけに影響を与えるという関係が確認され、仮説④、⑤も支持された。つまり、今回得られた結果は、援助や被援助の経験の影響がその後に援助者と被援助者の身の上に出現するとして高木のモデル（1997）の妥当性を検証したと言える。

本研究で検討した結果評価には、援助者あるいは被援助者の立場から援助を介して相互作用した他者について行うメタ認知を含んでいる。つまり、異なる立場の相手の心理を慮った結果がポジティブな場合は、その後の立場を替えた援助あるいは被援助の生起が促進され、反対に、ネガティブな場合は抑制されることが示唆された。相手に及ぶ行動結果についてのメタ認知は、相手の立場での過去の自らの行動経験の影響を受けるために、経験すればするほど、その評価・判断はより正確で妥当なものになると考えられる。それゆえに、個人における援助行動と被援助行動の間に正の関連性があり、かつ、過去の援助行動や被援助行動の経験が将来のそれらの行動を規定すると考えられる。

他者に及ぶ行動結果についてのメタ認知は、相手からの即時的な反応が見られる直接的な相互作用場面だけでなく、そのような反応が見られない間接的な相互作用場面における自らの行動結果の判断にも影響を及ぼすと考えられる。援助行動や被援助行動の経験後の心理的経験に影響を及ぼす要因については、今後も更なる検討が必要であると考ええる。

本研究は、同一人物における援助行動と被援助行動に同時に接近するという方法により、それぞれの経験における効果の有り様が、個人内の援助経験間の相互規定的、循環的關係に寄与することが示唆された。本研究の意義は、従来の研究で考えられてきた自己犠牲的という基本性質とは異なり、援助を介して人々が相互作用しながら、その効果を受けあう互恵的な行動としての援助行動の性質を明らかにした点にあると考える。この新しい援助の捉え方によって、援助者であるとともに被援助者にもなるという現実の援助的相互作用の根底にある心理的メカニズムの理解が少なからず進んだと考えるが、援助を介して相互作用する他者との関係性や状況の特性などの要因を今回は検討しておらず、今後の重要な課題になると考える。

注

- 1) 本研究は、関西大学経済・政治研究所の助成のもとに実施した。
- 2) 本研究の一部は日本心理学会第66回大会、日本社会心理学会第43回大会で発表した。
- 3) 本研究は、第1筆者の指導のもとで第2筆者が関西大学大学院社会学研究科に提出した博士論文の一部を加筆、修正したものである。
- 4) この点に関して、西川（1999）は、援助要請や援助受容などの被援助過程に関する従来の諸研究を概観し、特に日本文化においては、恩恵にお返しをしようという互惠的要素と援助するために犠牲を被った相手に償おうという補償的要素の両方が被援助行動に含まれているため、両者を分けて影響過程を検討すべきであると指摘している。例えば、恩恵を援助者の思いやりに帰属し、高い価値を付与し、ありがたいと感謝の気持ちを感じた場合、被援助者は互惠的に援助者に返礼するとし、これを実証している。
- 5) 今回記載した以外にも調査項目は存在するが、今回の分析には使用しなかったので省略した。
- 6) 近隣社会における高齢者の援助授与、援助要請、援助受容の各行動の、性別や年齢、健康度、ボランティア活動経験といった要因による差異については、高木・妹尾（2002）で報告しているのでこちらを参照されたい。
- 7) そのうち、援助、被援助ともないと回答した人が28名いたので、回答者114名を分析から除いた。分析2の重回帰分析（Table 2）においても同様に分析から除いた。

引用文献

- 相川充 1984 援助者に対する被援助者の評価に及ぼす返報の効果。心理学研究, 55, 8-14.
- Amato, P.R. 1990 Personality and social network involvement as predictors of helping behavior in everyday life. *Social Psychology Quarterly*, 53, 31-43.
- Bar-Tal, D. 1976 *Prosocial behavior: Theory and research*. New York: Halsted Press.
- DePaulo, B.M., Nadler, A. & Fisher, J.D. 1983 *New directions in helping(Vol.2) : Help-seeking*. Academic Press.
- Fisher, J.D., Nadler, A. & DePaulo, B.M. 1983 *New directions in helping(Vol.1) : Recipient reactions to aid*. Academic Press.
- Gouldner, A.W. 1960 The norm of reciprocity : A preliminary statement *American Sociological Review*, 25, 161-178.
- Greenberg, M.S. 1980 A theory of indebtedness. In k.J.Gergen, M.S.Greenberg & R.H.Willis(Eds.), *Social exchange: advances in theory and research*(pp.3-26). New York: Plenum Press.
- 松井豊・西川正之 2001 近隣における高齢者への援助 人間・社会関係問題研究班著 人間・社会関係のダイナミクス —ミクロからマクロまでの多角的分析—, (pp.125-164) 関西大学政治・経済研究所
- 松浦均 1992 援助者との関係性が被援助者の返報行動に及ぼす影響 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 39, 23-32.
- Nadler, A. & Fisher, J.D. 1986 The role of threat to self-esteem and perceived control in recipient reaction to help: Theory development and empirical validation. In Berkowitz, L. (Ed.), *Advances in experimental social psychology*(Vol.19) (pp.81-123). New York: Academic Press.
- Nadler, A., Fisher, J.D. & DePaulo, B.M. 1984 *New directions in helping(Vol.3) : Applied perspectives on help-seeking and -receiving*. Academic Press.

- 西川正之 1997 主婦の日常生活における援助行動の研究 社会心理学研究, 13, 13-22.
- 西川正之 1999 被援助者の反応過程に関する研究 関西大学大学院社会学研究科博士論文(未刊行)
- Omoto, A.M., & Snyder, M. 1995 Sustained helping without obligation: Motivation, longevity of service, and perceived attitude change among AIDS volunteers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 671-686.
- 妹尾香織 2001 援助者に及ぼす援助行動経験の効果(3)—援助成果と援助経験および援助に対する態度の関連— 関西心理学会第113回大会学会発表論文集, 83.
- 妹尾香織 2003 助け合いはどのように捉えられているか(1)—質問紙調査に寄せられた自由記述の分析— 関西大学大学院人間科学, 58, 87-103.
- 妹尾香織・高木修 2003 援助行動経験が援助者自身に与える効果: 地域で活動するボランティアに見られる援助成果 社会心理学研究, 18, 106-118.
- 妹尾香織・高木修 2004 高齢者の援助行動経験と心理・社会的幸福・安寧感との関連 心理学研究, 75, 428-434.
- Snyder, M. & Omoto, A.M. 1992 Who Helps and Why? The Psychology of AIDS Volunteerism In Spacapan, S., & Oskamp, S.(Eds.) 1992 *helping and being helped: Naturalistic studies*. Newbury Park, CA: Sage, Pp.213-239.
- 高木修 1997 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, 29, 1-21.
- 高木修・妹尾香織 2002 高齢者による援助行動の実態とその効用に関する研究(1)—近隣社会における援助授受の実態と性別, 年齢, ボランティア活動経験による差異— 関西大学社会学部紀要, 34, 143-183.

—2006.6.21受稿—